ゲーテにおけるGrenzeについて

大　杉　　洋

ゲーテはその長い生涯のなかで詩作をはじめとして、多岐にわたる文学的創作に携わり続けた。またその一方で、ヴァイマールにおける官職にいそしむ中で関心をそそられた、さまざまな自然科学の分野に関しても文学的創作に引けを取らない規模の著作を残した。そのいずれも、きわめて野心的であると同時に、ゲーテが能力の限りを尽くして生みだしたものと言えるだろう。その際、ゲーテが自分の生涯において探求しつくせない、あるいは答えを出すことができない、さまざまな限界（Grenze）と対峙することがしばしばあったであろうことは、想像に難くない。

ところで、ゲーテの文学作品における登場人物においても、限界（Grenze）が話題となる場面は少なくない。作者ゲーテと登場人物を同一視することは慎まなければならない。が、ゲーテの創作が自分自身の体験に深く根差していることも事実である。登場人物たちの生きる姿を通して、ゲーテが人間における限界（Grenze）をどのように描いているか、そこから何を読み取ることができるか、について考察することは興味深いことと思われる。

本稿では、その足がかりとして、筆者の目に留まった「限界」（Grenze）が扱われている箇所を取り上げ、考察を試みてみたい。作品としては『若きヴェルテルの悩み』、『親和力』、『ファウスト』第二部、そして結びとして詩「人間の限界」を取り上げたい。

1.『若きヴェルテルの悩み』（1774）より

ゲーテのシュトルム・ウント・ドラング期の代表作である『若きヴェルテルの悩み』から8月12日の書簡を取り上げる。この書簡においてヴェルテルは、ロッテの許嫁アルベルトに向かって次のように言っている。

> Die menschliche Natur, fuhr ich fort, hat ihre Gränzen: sie kann Freude, Leid, Schmerzen bis auf einen gewissen Grad ertragen, und geht zu Grunde, sobald der überstiegen ist. Hier ist also nicht die Frage, ob einer schwach oder stark ist? sondern ob er das Maß seines Leidens ausdauern kann? es mag nun moralisch oder körperlich sein: und ich finde es eben so wunderbar zu sagen, der Mensch ist feige, der sich

das Leben nimmt, als es ungehörig wäre, den einen Feigen zu nennen, der an einem bösartigen Fieber stirbt.

(Goethe: Die Leiden des jungen Werther, WA-I, Bd. 19, S. 64)[1]

人間の本性には限界というものがある。喜びにしろ、悲しみにしろ、苦しみにしろ、ある限度までは我慢がなるが、それを越えると人間はたちまち破滅してしまう。だからこの場合は強いか弱いかが問題じゃなくて、自分の苦しみの限度を持ちこたえることができるかどうかが問題なのではないか。精神的にせよ、肉体的にせよだ。だからぼくは自殺する人を卑怯だというのは、悪性の熱病で死ぬ人を卑怯だというのと同じように少々おかしかろうっていうのさ。

ここでは、若者でありながら人間の限界をきちんとわきまえているヴェルテルに感心させられる[2]。にもかかわらず、ヴェルテル自身は、ロッテへの恋心を胸に抱えつづけ、紆余曲折ののちに苦悩の限界に耐えることができず、ピストル自殺という結末を迎えてしまう。8月12日の書簡は、作品前半部にあってヴェルテルとアルベルトの性格の相違がはっきりと読み取れるように書かれている。また、この作品ではじめて「ピストル」のモティーフが取り上げられており、作品全体の構想にも深く関わっている。この書簡に本稿で取り上げたGrenzeというキーワードが使われていることに着目して読み直してみると、この手紙が作品全体において持つ重要性を再認識させられる[3]。

2.『親和力』(1809) より

次に、ゲーテの壮年期の小説『親和力』を取り上げる。この小説は二部構成で、それぞれ18章からなっている。作品全体の構成も、個々の描写も極めて巧みに仕上がっており、読者はこの作品を読み返すたびに、それまで気づいていなかった「仕掛け」に気づかされる。

作品冒頭では、エードゥアルトが男盛りの裕福な男爵として登場する。彼の存在は、『若きヴェルテルの悩み』でヴェルテルが自殺せずに生き続けたら、男盛りの頃にはどのように生きただ

1 本稿で引用したテキストは、以下のものを用いた：
Goethes Werke. Hrsg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV Abtheilungen. 133Bde. Weimar 1887-1919. 本稿では WA と略記する。

2 ボルガルツは、限界をわきまえて考えるヴェルテルを、新しいタイプの人間像であると指摘している。S. Roland Borgards: Das Leben ein Schmerz. Die Geschichte einer Denkfigur in Literatur und Medizin. In: Die Grenzen des Menschen: Anthropologie und Ästhetik um 1800. Hg. von Maximilian Bergengruen, Roland Borgards, Johannes F. Lehmann. Würzburg:Königshausen u. Neumann 2001, S. 154.

3 『ヴェルテル』に先行するゲーテの作品から、「限界」に言及している箇所を紹介しておきたい。『新歌集(Neue Lieder)』(1770)に収録された「献辞(Zueignung)」においては、詩人を称えて以下のように言われている。「詩人は君たちと同じくよくやったのだ／そして幸福の限界を心得ている」S. Der junge Goethe. Bd. 1. Hg. Von Hanna Fischer-Lamberg. Berlin; New York 1999, S. 304.

ろうか、という問いに答えるようなところがある。

さて、エードゥアルトと妻のシャルロッテは、二人が暮らす領地を整えるために、エードゥアルトの親友である大尉とシャルロッテの姪オッティーリエが呼び寄せた。この四人の共同生活において「親和力」が働き始める。エードゥアルトには大尉が、そしてシャルロッテにはオッティーリエがいることで、何かと気晴らしになるだろう、というのが当初の目論見だったが、「親和力」は、エードゥアルトとオッティーリエ、大尉とシャルロッテを恋愛関係に陥らせたのである。

オッティーリエの誕生日を準備する場面においては、「親和力」の作用がかなり進行し、オッティーリエに耽溺するエードゥアルトの様子が描かれている。

> Eduards Neigung war aber gränzenlos. Wie er sich Ottilien zuzueignen begehrte, so kannte er auch kein Maß des Hingebens, Schenkens, Versprechens. Zu einigen Gaben, die er Ottilien an diesem Tage verehren wollte, hatte ihm Charlotte viel zu ärmliche Vorschläge gethan. Er sprach mit seinem Kammerdiener, der seine Garderobe besorgte und mit Handelsleuten und Modehändlern in beständigem Verhältniß blieb; dieser, nicht unbekannt sowohl mit den angenehmsten Gaben selbst als mit der besten Art sie zu überreichen, bestellte sogleich in der Stadt den niedlichsten Koffer mit rothem Saffian überzogen, mit Stahlnägeln beschlagen, und angefüllt mit Geschenken, einer solchen Schale würdig.
> （Goethe: Die Wahlverwandtschaften, WA-I, Bd. 20, S. 152）

> エードゥアルトの耽溺には、まさに限界がなかった。彼はオッティーリエをぜひとも我が物にしたいと願っていたので、その献身も、贈り物も、約束も、とどまるところを知らなかった。彼がオッティーリエの誕生日に贈ろうと望んでいる品々に比べて、シャルロッテが提案した贈り物はあまりに貧しいものであった。彼は侍従に相談を持ちかけた。その侍従はエードゥアルトの服装の世話をしていて、さまざまな商人や服装商といくつも接触があったのである。この男は最上の贈り物についても、またそれを贈る最上の方法についても十分に心得があったから、すぐに町でとてもかわいらしいトランクを発注した。赤いモロッコ革の品で、鋼鉄の鋲が打ってあり、中はその器にふさわしい高貴な贈り物でいっぱいであった。

振り返ってみると、エードゥアルトとシャルロッテは、愛し合っていたにもかかわらず、両親の意向で別の人と結婚せざるを得なかった。最初の配偶者が双方とも先に亡くなったことによって悲願の再婚を果たしたのである。それ故、新たな夫婦生活を営むための環境づくりにはいろいろ配慮していた。例えば、シャルロッテの娘と姪オッティーリエをペンションに預け、「二人きり」でいられることに重きを置いていた。にもかかわらず、新生活が一段落したところで、

エードゥアルトは領地をよりよく整えるために、失業中の親友である大尉を自分たちの所へ迎え入れることを提案した。「二人きり」の暮らしが中断することにシャルロッテは不安を覚えたが、エードゥアルトは自分の意見を押し通し、シャルロッテの相手としてオッティーリエを呼び戻すことにした。失業中の親友に対する善意による行為がきっかけとなった夫婦生活の変化は、しかし、「親和力の」予測できない作用によって、次第に破局をもたらしていく[4]。その意味で、小説『親和力』はその筋書自体が、容赦なく限界をわきまえない小説である。オッティーリエへの愛に溺れて、際限もなく盲目となったエードゥアルトの描かれ方をみていると、興味深いことに、ヴェルテルが、若くして人間の限界をわきまえていたのとは対照的なことに気づかされる[5]。

3.『ファウスト』第二部（1831）より

続いてゲーテの生涯にわたる創作『ファウスト』の第二部を取り上げる。この作品の舞台はゲーテの生きた時代にとどまらない。第二幕から第三幕にかけて、ギリシア古代神話の世界に遡り、ドイツ中世を経てふたたびヨーロッパ近代に戻ってくる。いわば人類の歴史を一通り概観していると見ることもできるこの作品には、人間存在の普遍的なあり方が随所に描かれている。

第一部におけるファウストを簡潔に振り返るならば、彼は四大学問を修めた大学者だが、自分は何一つ知ることができないことを自覚し、すべてを知りたい、神と肩を並べたい、と切望する、限界をわきまえない人間だった[6]。そして悪魔メフィストと契約し、若返りを果たすが、恋人のグレートヒェンを嬰児殺しの罪で死なせてしまった。

さて、第二部冒頭のファウストは、夜明けとともに草原の美しい光景に癒されて生命力を回復する。彼は太陽に挨拶しようとして目がくらむが、人間が太陽を直視できないという現実を受け入れる。「色彩を帯びた反映の中に我々の人生はある」と発言する新生ファウストには、限界をわきまえた、等身大の人間を認めることができる。

しかし、『ファウスト』第二部において、「限界」をめぐるファウストの描かれ方は一貫せず、矛盾をはらんでいる。

つづく第一幕「皇帝の居城」において、経済不況にあえぐ帝国でメフィストが皇帝に不換紙幣の発行を促す場面でファウストは次のように言っている。

---

4 ブラントシュテッターは、『親和力』においては、愛の希求のみならず、死への希求によっても人間が限界を踏み越えていくことに言及している。S. Gabriele Brandstetter: Schreibszenen - Briefe in Goethes Wahlverwandtschaften. In: Goethe und die Zeitalter der Romantik. Hg. von Walter Hinderer. Würzburg:Königshausen u. Neumann 2002, S. 203.

5 『親和力』と同時期に執筆された『色彩論』教示篇177では、根本現象に関して、自然観察者に対する次のような戒めの言葉があるので引用しておきたい。「人は見つけたものを根本現象であると承認したがらない。我々はここに観ることの限界があることを白状すべきなのに、その背後やその上にさらに何かそれ以上のものを探し出そうとしてしまうのだ。」S. Goethe: Zur Farbenlehre. Didatitischer Theil. WA-II. Bd. 1, S. 73f.

6 ヨッヘン・シュミットは、『ファウスト』第一部「夜」におけるファウストの立ち居振る舞いには、限界を踏み越えかねないメランコリーの症状が描かれていることに言及している。Jochen Schmidt: Goethes Faust. Erster und Zweiter Teil. Grundlagen – Werk – Wirkung. München: C. H. Beck 1999, S. 102.

Faust.
Das Übermaß der Schätze, das, erstarrt,
In deinen Landen tief im Boden harrt,
Liegt ungenutzt. Der weiteste Gedanke
Ist solchen Reichthums kümmerlichste Schranke,
Die Phantasie, in ihrem höchsten Flug,
Sie strengt sich an und thut sich nie genug.
Doch fassen Geister, würdig tief zu schauen,
Zum Gränzenlosen gränzenlos Vertrauen.
(Goethe: Faust II, Z. 6111ff.)

ファウスト
あなたのお国で地の底深く動かずに、待っている
数えきれない財宝は、手つかずで
横たわっています。どんな大きい計画も、
そういう宝のつまらぬ制約になる。
空想をいくらはばたかせても、
疲労困憊して、不十分なままです。
しかし深く物を見て取る方々は、
無限なるものに限りなく信を置くのです。

ここでのファウストの発言は少しも限界をわきまえていない。不換紙幣の大量発行を促すメフィストに躊躇なく加担している。以下、金銭を通して人間の際限のない欲望がクローズアップしていくさまが描かれていくこととなる。

この後もファウストは、悪魔メフィストの魔法の力を借りて、人間の限界を超える体験を重ねていく。第一幕後半では、「母たち」のところからギリシア神話のヘレナとパリスの幻を連れ出して皇帝が観劇する舞台に登場させる。そして、二人が愛し合う場面に激昂して気を失ってしまう。さて、失神状態のファウストは第二幕においてメフィスト、ホムンクルスとともに時空を超えて「古典的ヴァルプルギスの夜」を体験する。目覚めたファウストは、かつてヘレナが生きていた大地に自分が触れていることに感激し、いくばくかの落ち着きも取り戻したように見える。しかし、ヘレナと会いたい、という「限界をわきまえない」願望が彼の脳裏から去ることはない。興味深いことに、この夢幻的場面においては、「限界をわきまえない」願望も肯定的に評価されている。ファウストと面会したマントーは、「不可能なことを欲する人が私は好きなのです」（Goethe: Faust II. Z. 7488）と言って、ファウストをヘレナと邂逅できるように導く。第三幕「城の中庭」の場面でファウストとヘレナの邂逅は実現し、二人は結ばれる。つづく「アルカディア」では二人の息子オイフォリオンが登場し、空を飛びたいという願望をまくし

たてる。ここでファウストが節度をわきまえるように、と息子をさとす（Goethe: Faust II. Z. 9717ff.）が、これまでの「限界」をわきまえてこなかったファウストが、自分のことを棚に上げている場面である。ほどなく、オイフォリオンも、そしてヘレナも彼の目の前から消え失せ、ファウストは雲に包まれて山上に運ばれ、第四幕冒頭となる。ここでファウストは遠くの雲に別れたばかりのヘレナの姿を見出し、また、近くに流れてきた霧が天井に上っている様にかつての恋人グレートヒェンの面影を感じ取る。こうして落ち着きを取り戻したのもつかの間、メフィストが登場し、反皇帝の軍勢の攻撃で窮地に陥った皇帝軍に加勢することを促すと躊躇なくそれに従う。皇帝軍勝利の後には戦利品をあさる者たちの際限のない欲望が描かれる。

最終幕である第五幕において、老ファウストは富も権力も手に入れた宮殿の主として登場する。彼は、自分の敷地の隣に住むフィレモンとバウツィスの夕べのお祈りで鳴らされる鐘の音に我慢できない。メフィストに二人を別のところに移させるように命じるが、言うことを聞かない二人をメフィストは焼死させてしまう。

「憂い」という名の女にファウストは失明させられるが、そのことにはお構いなしに、ダム建設の指令を下す。これは、本来無制約、無限である自然にGrenze、すなわち制約、限界、境界を加えようとする行為である[7]。

Faust *aus dem Palaste tretend tastet an den Thürpfosten*.
Wie das Geklirr der Spaten mich ergetzt!
Es ist die Menge, die mir fröhnet,
Die Erde mit sich selbst versöhnet,
Den Wellen ihre Gränze setzt,
Das Meer mit strengem Band umzieht.
（Goethe: Faust II, Z. 11539ff.）

ファウスト（宮殿から出てきて戸口の柱を手探る）
鍬鍬の音がなんと自分を楽しませることか!
大勢の人々が自分のために働き、
土を自分たちのところに納め、
寄せる波に境界を設け、
海を堅固な堤防で取り囲むのだ。

7 『ヴィルヘルム。マイスターの遍歴時代』第3部第12章において、オドアルトが旧世界（ヨーロッパ）と新世界（アメリカ）における自然開拓の違いについて語っているが、ここでもGrenzeが重要なキーワードとなっているのが興味深い。「新世界では境界のないことが克服しがたい障害であると思われる一方で、旧世界では簡単に境界が設けられているということが一層克服しがたい障害となっています。」（Goethe: Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden, WA-I, Bd. 25i, S. 216）

しかし、その工事の音は、メフィストが命じて、ファウストの墓穴を掘らせている音であった。にもかかわらず、ファウストはダム建設による理想の国家建設を思い描きながら死んでいく。

こうして見ると、『ファウスト』第二部においても、限界をわきまえないファウストの方が際立っていることが分かる[8]。

『ファウスト』第二部におけるファウストの「限界」をめぐる行動は矛盾をはらんだものであるが、このことについて考察してみたい。『ファウスト』第一部の「書斎」の場面で、メフィストは「私たちは小さな世界を、それから大きな世界を見てまいります」（Goethe: Faust I, Z. 2052）と言っている。「小さな世界」とは『ファウスト』第一部後半の舞台である近代ヨーロッパ市民社会を指している。対して「大きな世界」は『ファウスト』第二部で描かれている多様性に富んだ、広大な世界に対応している。先述したように時代的には「古典的ヴァルプルギスの夜」において古代ギリシア神話の世界に遡り、中世を経て近代ヨーロッパに戻ってきている。また、近代ヨーロッパの社会、政治、自然科学等、多岐の分野にわたる問題意識に基づいたモティーフが扱われている[9]。このような作品世界の中で、主人公ファウストは、メフィストの魔法に翻弄されながら、様々な世界を紹介する役割を演じている。その多様性に対応するために、彼の言動に一貫性を与えることはむしろ放棄されている、と考えることができるのではないだろうか[10]。

「限界」をめぐるファウストの揺れ動きを振り返ると、彼が限界をわきまえている、と思われるのは、第一幕冒頭、第二幕「古典的ヴァルプルギスの夜」、第四幕冒頭に見られるように、彼と自然の触れ合いが描写される場面であった。対して、ファウストが限界をないがしろにしている場面は、ファウストがヘレナを追い求めて行動する場面がまず挙げられる。それから、注目すべきは近代における文明化に関するモティーフが扱われる場面である。第一幕では不換紙幣の発行で人間の際限のない欲望が強調される。第四幕では戦争の場面において、人間の支配欲、権力欲、物欲等、際限のない欲望が再度強調される。そして第五幕ではダム建設――このモティーフは人類による自然支配ないしは環境破壊に相当するが――による理想の国家を夢見つつファウストが息絶える。こうしてみると、限界をわきまえないファウストを通して、自然と対立する文明化の進行とともに人類が陥りがちな過ちや危険がほのめかされていることが分かる。

---

8 ゲーテ自身はＦ・Ｊ・ソレとの対話（1830年2月3日）において、老人というものが長い生涯の経歴を、最後の日々においてもなお過激な人物となるという形で終えられる、ということは私にとって新たな問題だ、と語っている。ここで言われている過激な人物は「限界」を超えていこうとする人物に相当するだろう。S. Goethes Gespräche. Biedermannsche Ausgabe. Bd. 3. Zweiter Teil. Hg. Von Wolfgang Herwig. München 1998, S. 557.

9 S. Jochen Schmidt: Goethes Faust, S. 213f.

10 ヨッヘン・シュミットは『ファウスト』第2部におけるファウストが、近代文明人の根本をなす考え方や行動を代表している点に言及し、彼が「個人であるというよりはむしろ役割である」と言っている。S. Jochen Schmidt: Goethes Faust, S. 218f.

結び

結びとして、本稿のテーマであるGrenzeが表題となっている詩「人間の諸限界」（1781）を引用してみたい。

Gränzen der Menschheit.

Wenn der uralte
Heilige Vater
Mit gelassener Hand
Aus rollenden Wolken
Segnende Blitze
Über die Erde sät,
Küss' ich den letzten
Saum seines Kleides,
Kindliche Schauer
Treu in der Brust.

Denn mit Göttern
Soll sich nicht messen
Irgend ein Mensch.
Hebt er sich aufwärts,
Und berührt
Mit dem Scheitel die Sterne,
Nirgends haften dann
Die unsichern Sohlen,
Und mit ihm spielen
Wolken und Winde.

Steht er mit festen
Markigen Knochen
Auf der wohlgegründeten
Dauernden Erde;
Reicht er nicht auf,
Nur mit der Eiche
Oder der Rebe

Sich zu vergleichen.

Was unterscheidet
Götter von Menschen?
Daß viele Wellen
Vor jenen wandeln,
Ein ewiger Strom:
Uns hebt die Welle,
Verschlingt die Welle,
Und wir versinken.

Ein kleiner Ring
Begränzt unser Leben,
Und viele Geschlechter
Reihen sich dauernd
An ihres Daseins
Unendliche Kette.
（Goethe: Gränzen der Menschheit, WA-I, Bd. 2, S. 81f.）

人間の諸限界

太古の
聖なる父が
落ち着いた手つきで
とどろく雲から
恵みの稲妻を
地上に蒔くとき
私はその衣の
端に口づけをする
子供のようなおののきを
たえず胸に感じながら

というのも人間は
神々と
競ってはいけないから
人間が空に昇って

その頭で星々に
触れたところで
足の裏は頼りなく
支えとなるところを失い
そして風と雲に
もてあそばれてしまう

人間ががっしりした
力強い骨太の足で
揺らぐことのない
永遠の大地に立ったところで
到達しえないのだ
ただカシワや
ブドウの木と
比べられるだけなのだ

神々と人間を
分かつものは何か?
多くの波が
変わりゆくとも、神々にしてみれば
永遠の一つの流れであり続ける
我々はその波に運ばれ
呑まれ
沈んでゆく

一つの小さな輪が
我々の生に限界を設けている
そして多くの世代が
絶えることなく連なって
神々の存在の
無限の鎖につながっている

この詩においては、無限にして不死の存在である神々と、有限で死すべき存在である人間の対比が豊かな詩的言語で綴られている。最終連における、「輪」「鎖」という言葉づかいの中に束縛、制約、ひいては限界が象徴的に表現されている。この詩はゲーテがヴァイマールの官職に就いてからしばらく経った頃の創作であるが、人間の諸限界をきちんとわきまえて格調高く

詩にまとめ上げていることが読み取れる。

本稿で取り上げた箇所を比べてみると、ゲーテの若いころの創作の方が、あるいは、ゲーテが描いた若き登場人物の方が、限界をわきまえた人間像が際立っていたように思われる。ただし、このことについては、より多くの検証が必要であることは言うまでもなく、一般化することは控えておきたい。例えば、ゲーテが最晩年に完成した大作としては、『ファウスト』第二部と並んで『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』がある。主人公ヴィルヘルムは「諦念者」として描かれており、言い換えれば「限界」をわきまえた人物である。その点で『ファウスト』第二部第五幕における老ファウストとは対照的である。ただし、『遍歴時代』の最終場面におけるヴィルヘルムは、老ファウストと比べると、まだはるかに若い。また、主人公ヴィルヘルム以外の登場人物においては、挿入されたいくつかのノヴェレに見られるように、「諦念」の境地に到達していない、「限界」をわきまえない登場人物が描かれている[11]。

ゲーテは何事においても、一面的に即時に判断することを控えるところがあった。むしろ態度を留保して、対象を両面から、あるいは多面的に考察し、その対象に関して異なる見解を残していることも少なくない[12]。そこから察するに、「限界」に関しても同じことが言えるのではないだろうか。すなわち、人間には限界が設けられている。にもかかわらず、人間の欲望は際限がなく、しばしばそれを超えていこうとする。その多様なあり方が、文学作品における登場人物たちにおいて描かれていると思われるのである。

本稿では、Grenzeをキーワードとしてテキストを読み返してみることで、登場人物がGrenzeをわきまえる場合、わきまえない場合について考察したが、Grenzeは、ゲーテ作品に描かれる人間存在を考察するうえで、きわめて有効な着眼点である。そして、ゲーテが豊かな言葉づかいで人間存在の普遍的な諸相を描き出していることを、Grenzeを着眼点として改めて確認できたと思われる。

---

11 『遍歴時代』に挿入されたノヴェレ『五十歳の男』では、五十歳になった少佐が息子と姪ヒラーリエの婚約を願っていたが、ヒラーリエが少佐に思いを寄せていることを知らされる。ヒラーリエを意識した少佐は、友人である俳優の指南する若返り術を試みる。この若返りの試みは、初めは成功したように思われたが、やがて、肉体の老化を意識せざるを得なくなり、失敗に終わる。（WA-I. Bd. 24, S. 260ff.）

12 望遠鏡に関して、『箴言と省察』においては、それが人間の感覚を混乱させるという発言（WA-I. Bd. 42ii, S. 174）がある一方で、『ノヴェレ』においては、大公夫人が、狩りに向かう大公の姿を望遠鏡で捉えて、大公が目を輝かせている様子が生き生きと描かれている（WA-I. Bd. 18, S. 318）。

Zur „Grenze“ bei Goethe

Hiroshi OHSUGI

Goethe beschäftigte sich mit einem breiten Spektrum an Themen und Fragen sowohl in seinem literarischen Schaffen als auch in seinen naturwissenschaftlichen Forschungen. Es ist unschwer vorstellbar, dass Goethe dabei oft an die Grenzen dessen stieß, was zu seiner Zeit erforschbar und beantwortbar war.

In zahlreichen literarischen Werken Goethes spielt das Thema „Grenze“ ebenfalls eine wichtige Rolle. Auch wenn man den Autor Goethe nicht mit seinen Figuren gleichsetzen darf, ist es interessant zu fragen, wie Goethe die Grenzen des Menschseins durch seine Figuren darstellt und was sich daraus ablesen lässt.

In diesem Aufsatz werden Stellen in „Die Leiden des jungen Werther“, „Die Wahlverwandtschaften“, „Faust II“ sowie zum Schluss das Gedicht „Grenzen der Menschheit“ betrachtet, in denen Grenzen angesprochen werden.

In „Die Leiden des jungen Werther“ berichtet Werther in seinem Brief vom 12. August von seinem Gespräch mit Albert, in welchem er ausführlich die Grenzen des Menschen erörtert. Darin zeigt sich, wie sehr er sich als junger Mann bereits der Grenzen des menschlichen Wesens bewusst ist.

In „Die Wahlverwandtschaften“ dagegen tritt Eduard als ein wohlhabender Baron in der Blüte seines Lebens auf, der sich aber in seiner Verliebtheit in die Nichte seiner Frau Lotte, Ottilie, verliert. Seine Grenzenlosigkeit steht dabei in einem deutlichen Gegensatz zu der des jungen Werthers.

In der Szene der Morgendämmerung zu Beginn des ersten Aktes von „Faust II“ wird Faust, umgeben von der Schönheit der Natur, als ein neuer Faust wiedergeboren, der die Grenzen der Menschlichkeit kennt. Jedoch ist das Verhalten Fausts im gesamten Werk von „Faust II“ voller Widersprüche, und der Faust, der seine Grenzen nicht kennt, tritt darin besonders hervor. Der alte Faust, der im fünften Akt als Schlossherr auftritt, ist ein eigensinniger alter Mann, für den Rücksicht und Toleranz, die seinem Verhalten Grenzen setzen würden, keine Bedeutung haben.

Das Gedicht „Grenzen der Menschheit“ schließlich stellt in eindrucksvoller poetischer Sprache das grenzenlose Dasein der Götter dem begrenzten Dasein des Menschen gegenüber.

Vergleicht man die in diesem Aufsatz besprochenen Stellen, so fällt auf, dass Goethes frühere Werke mehr von dem Bild eines Menschen geprägt waren, der die Grenzen kennt. Bei der erneuten Lektüre der Texte im Hinblick auf „Grenzen“ und ihre Behandlung sieht

man, dass sie für Goethe ein Schlüsselelement bei der Betrachtung der menschlichen Existenz sind.